

(2) 尊経閣所蔵本 (二)

写本。一冊。

紙は楮紙。仮綴じ。縦三十一・五糎。横二十二・二糎。

表紙に題字なし。遊紙各二丁。

八行書。詩は全て二段に写す。返点・句点等はない。部分的に傍訓・異文等の墨筆による注記がある。奥書に「菅家後集寄附之意趣者、賀州大守羽林菅原綱利朝臣、連々依為尊望、老眼霧中難看遂書功、命息息拾遺長量、令模写畢。他見憚多端。延宝第八玄冬晦、菅儒竜作豊長」とある。三〇丁。

(3) 尊経閣所蔵本 (三)

写本。一冊。

紙は楮紙。茶色の厚紙(模様入)の表紙。

縦二十九・三糎。横十八・八糎。

表紙左上に「菅家後集」と墨筆で記されている。前一丁、後二丁遊紙。

八行書。詩は二〜三段で書写されている。二十二丁。

(4) 尊経閣所蔵本 (四)

写本。一冊。

紙は楮紙。茶色の厚紙の表紙。縦二十九糎。横十七・七糎

表紙左上に「菅家後集」と墨筆で記す。右下に「此本係影抄凡七八百年前古本者尤貴重」という手識がある。前後各一丁

の遊紙。八行書。一行二十一字のベタ書。朱筆にてヲコト点をさす。落丁がある。二十一丁。

(5) 静嘉堂所蔵本

写本。一冊。

紙は楮紙。青表紙。縦二十七・四糎。横十九・九糎。

前後各一丁に遊紙。

二〇字一〇行書。返点・句点等はない。数箇所、傍訓、異文等の墨筆による注記がある。「堀三義図書印」の印記が押されている。奥書に「右菅家後集以予所蔵古本写之得一摺紳家秘本對照訂正」とある。十四丁。

(6) 島原松平文庫本

写本。一冊。

薄茶色。縦二十七・八糎。横二〇・二糎。前後各一丁に遊紙。袋綴。

八行ベタ書。題簽が左肩にある。縦九・九糎、横二・一糎で、上の方に詰めて「菅家後集」と墨書されている。巻末に表二首と巨為時作贈太政大臣の詔勅とが載せられている。奥書に「天承元年八月八日新納北野聖廟以宮寺權上座勝還令触留守政所ノ円真大法師矣ノ朝散大夫藤廣兼下本見〇〇〇〇」とある(ノは改行を示す)。二〇丁。

(7) 金沢市立玉川図書館大島文庫本

写本。一冊。

厚紙表紙。縦三〇・四糎。横二〇糎。紙は楮紙。袋綴。

十五字八行詰。題僉が左肩にある。縦十七・六糎、横三・四糎で「菅家後集」の紙を貼付する。朱筆の頭注及び句点が全頁に施されている。又朱筆のイ本校合書人等がある。返点・送仮名等はなし。二十八丁。

(8) 金沢市立玉川図書館加越能文庫本

写本。一冊。

淡茶色の表紙。楮紙。縦二十三・二糎、横十六・六糎。袋綴。十四字八行詰。遊紙前後各一丁。

「松雲公採集遺編類纂、一七七詩歌」の紙(縦十六・四糎、横三・二糎)を左上方に貼付する。全一〇〇丁のうち、「菅家文章」抄出十一丁。「菅家後集」抄出六丁。巻末に「明和三年初夏、末孫藤原為村」の識語を付す。目次巻頭に「松雲公遺稿古文類纂 森田平次輯纂」の一文を付す。収録されている作品は以下の通りである。

「萬葉集長歌並抄出」「懐風藻抄出」「菅家文章並後草抄出」
「梅城録」「讀千字文詩」「氣多宮歌合」「南朝記傳抄出」「李花集新葉集抄出」「醒醐雜抄抄出」「冷泉為和卿集抄出」

(9) 内閣文庫本

写本。一冊。

藍表紙。後一丁遊紙。

八行十七字詰。題僉が左肩にある。上の方から詰めて「菅家文章十三終」と墨書されている。「見右丞相獻家集」から「讀開元詔書 古調五言」の四句目「一為老人星」まで訓点が付されている。それ以降は無点である。二十三丁。

(10) 大宰府天満宮所蔵本 (一)

写本。一冊。

青色表紙。紙は楮紙。縦二十五・二糎、横十七・二糎。前後に一丁、遊紙がある。

九行二〇字詰。
全文に朱筆による訓点が付されている。巻末に墨書で「天保二年辛卯十月謹模写之、菅家三十七世孫中務卿信積」と書写名を注記している。二十一丁。

(11) 大宰府天満宮所蔵本 (二)

写本。一冊。

茶色表紙。紙は楮紙。縦二十六糎。横十九糎。
九行十七字詰。

部分的に墨筆による句点が付してある。途中「東山小雪」のみ墨筆の訓点が付してある。

最後に黒川道祐の「菅家後草卷十三跋」が付けられている。
二十三丁。

一

今回は「菅家後集」の中で調査・考察を済ませた。「476 五言自詠」の注釈を二章で、「480 聞旅雁」の注釈を三章で試みたいと思う。

注釈を試みるにあたり先学のさまざまな業績に負うこと多大であるが、とりわけ○川口久雄氏校注『日本古典文学大系 菅家文章・菅家後集』○小島憲之氏編『王朝漢詩選』○小島憲之・山本登朗氏共著『日本漢詩人選集 菅原道真』○清藤鶴美氏著『菅家の文章』の著作より通釈・語釈を試みる上で多くの教示を得た。

注釈を進める上での「凡例」を次に示して本論に入りたい。

凡例

一、底本には川口久雄氏が岩波古典文学大系本に採られている「前田家尊経閣所蔵本（一）」を用いた。

一、原詩のみ正字で載せ、語釈・通釈等は現代かなづかいを用いた。

一、注釈にあたり、「菅家後集」の作品番号は、岩波日本古典

文学大系本のそれにならない参考として引用した嶋田忠臣の「田氏家集」の作品番号は内田順子氏編「田氏家集索引」に拠り、紀長谷雄の漢詩文の作品番号は三木雅博氏編「紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引」に拠った。又白居易の「白氏文集」の作品番号は花房英樹氏著「白氏文集の批判的研究」のそれにならった。

一、校異に用いた諸本は以下のように略号で示す。順不同。

写本

- (尊一) …… 尊経閣所蔵本 (一) 一冊(底本)
- (尊二) …… 尊経閣所蔵本 (二) 一冊
- (尊三) …… 尊経閣所蔵本 (三) 一冊
- (尊四) …… 尊経閣所蔵本 (四) 一冊
- (内一) …… 内閣文庫本 (一) 一冊
- (静嘉) …… 静嘉堂所蔵本 一冊
- (大島) …… 金沢市大島本 一冊
- (加越) …… 金沢市加越能文庫本 一冊
- (太一) …… 太宰府天満宮所蔵本 (一) 一冊
- (太二) …… 太宰府天満宮所蔵本 (二) 一冊
- (松平) …… 島原松平文庫本 一冊

刊本

- (金沢大) …… 金沢大学所蔵本 一冊

(中之島) ……	大阪府立中之島図書館所蔵本	一冊
(九州大) ……	九州大学所蔵本	一冊
(京都大) ……	京都大学所蔵本	一冊
(筑波大) ……	筑波大学所蔵本	一冊
(東北大) ……	東北大学所蔵本	一冊
(東洋大) ……	東洋大学所蔵本	一冊
(書綾部) ……	書綾部所蔵本	一冊
(舞鶴) ……	舞鶴中央図書館所蔵本	一冊
(鈴鹿) ……	鈴鹿文庫本	一冊
(住吉一) ……	住吉大社所蔵本 (一)	一冊
(住吉二) ……	住吉大社所蔵本 (二)	一冊
(多和) ……	多和文庫本	一冊
(三手) ……	三手今井所蔵本	一冊
(島根大) ……	島根大学所蔵本	一冊
(内閣二) ……	内閣文庫本 (二)	一冊
(内閣三) ……	内閣文庫本 (三)	一冊
(内閣四) ……	内閣文庫本 (四)	一冊
(川口) ……	石川県立図書館川口文庫本	一冊

一、平仄の表記には、平声に○、仄声に●、韻字に◎を用いた。
 一、語釈等で主に利用した辞典は、『大漢和辞典』及び漢語大
 詞典編輯委員会編纂『漢語大詞典』である。

二

本文

平仄

476 五言自詠

離家三四月

落涙百千行

万事皆如夢

時々仰彼蒼

○○○○●
 ●●●○○
 ●●○○●
 ●●○○●
 ○●●●○

脚韻は下平声陽韻。韻字は行・蒼

校異

○五言：ナシ (内一)(大島)(加越)(松平)(尊二)(尊四)(太二)

(太二) 刊本 全本

○題下「自此以後州八首謫中之作」分注：(内一)(松平)(大島)

(尊四)(太二)(太二) 刊本 全本

○頭注「自詠下有五言二字分注自此以下無」：(大島)

○頭注「昌泰四年」謫中之作」：(加越)

○頭注「昌泰四年」：(松平)(尊四)

○仰(●)：仔(○)(松平)

○彼(●)：被(●)(尊四)(松平)

訓読

- ・家を離れて三四月
- ・落つる涙は百千行
- ・万事皆夢のごとし
- ・時々彼蒼を仰ぐ

通釈

- ・京都の家を離れてもう三・四箇月が経つ。
- ・涙がこぼれて百すじ千すじ頬をつたって流れくだる。
- ・(人生の転変の激しさにあきれはてて)世の中の全てのごことは夢と思うほかはない。
- ・かの青い天を振り仰いで、我が身の不運を訴える。

語釈

○離家…(京都の)家を離れる。家族と別れて暮らす。『楚辞』「九辨」に「去郷離家兮徠遠客、超道遙兮今焉薄」の句が見える。↓補説 参照。『菅家文章』75秋日山行二十韻に「歩曆三秋暮、離家五日朝」の句が、236舟行五事―三首に「客有離家者、看覓灑血啼」の句が、「243題驛樓壁」に「離家四日自傷春梅柳何因觸處新」の句が見える。(傍線筆者、以下同じ)

○三・四月…岩波古典大系本の頭注で川口久雄氏は「すでに太宰府の謫居に落ちついて詠んだものと見える。二月一日に京を離れているから三、四ヵ月を経過して、これを詠んだのは、四

月か五月ごろであろう」と述べておられる。

○落涙…涙を流す。落ちる涙。『田氏家集』37於右丞相省中直廬讀史記竟詠史得高祖應教に「萬乘威加新海内、數行淚落故鄉情」の句が見える。『菅家文章』239冬夜閑居話舊以霜爲韻に「不恨寒更三五去、無堪落淚百千行」という同一表現が見えるし、「211同諸小兒、旅館庚申夜、賦靜室寒燈明之詩」に「強勸微心雖未死、頻収落淚自爲悲」の句が、「菅家後集」484彼意一百韻に「落淚欺朝露、啼聲亂杜鵑」の句が見える。

○行…頬をつたって流れる涙のすじ。『菅家文章』には前述の「239冬夜閑居話舊、以霜爲韻」の六句目に「無堪落淚百千行」とある他、「190得故人書、以詩答之」に「拆封知再改風光、讀未三行淚數行」『菅家後集』486哭興州藤使君に「言之淚千行、生路今如此」の句が見える。

○万事…すべての事。あらゆる事。『漢語大詞典』では「一切事」と説明し「李白・古風之五九」の「萬事固如此、人生無定期」の例を採る。『菅家文章』には「272驚冬」に「不愁官考三年黜、唯歎生涯万事非」の句が見え、「309獨吟」に「詩興變來爲感興、關身万事自然悲」の句が見える。

○如夢…『日本漢詩人選集 菅原道真』の中で、小島憲之氏は『白氏文集』3409枕上作の五・六句目「迴思往時紛如夢、轉覺餘生香若浮」を例に引き「過去のできごとなどが夢のようだとされることが多いのに対して、ここは逆に、現在に至るこの『離家三四月』のことをさして言う。なぜこんなことになった

のか、作者にはその意味がわからず、現在の状態に納得することもできずにいるのである。」と述べられている。

○時々：いつも。常に。「漢語大詞典」に「常常」と説明があり「唐李咸用」の「題劉處士居詩」の「溪鳥時時窺戶牖、山雲往往宿庭除」を載せる。「白氏文集」3125題令狐家木蘭花」に「従此時時春夢裏、應添一樹女郎花」の句が見える。

○仰：「漢語大詞典」には「仰天」として次のように説明されている。

仰望天空。多為人抒發抑鬱或激動心情時的狀態

として、「春秋左氏傳」襄公二十五年」の「晏子仰天歎曰、嬰所不唯忠於君、利社稷者與、有如上帝」の一文及び「李白、南陵別兒童人京詩」の「仰天大笑出門去、我輩豈是蒿人」の句を引用している。

○蒼：蒼天。天。あおぞら。大空。天は遠くから眺めたとき蒼蒼然として青いからいう。蒼空。「漢語大詞典」では「○指天」と説明し「詩経」王風・黍離」の「悠悠蒼天、此何人哉。(毛傳)蒼天以体言之：據遠視之蒼蒼然、則稱蒼天」の一文を載せる。

○彼蒼：「漢語大詞典」には「詩経」秦風・黃鳥」の「彼蒼者天、殲我良人(孔穎達疏)彼蒼蒼者是在上之天」を引き「后因以代称天」と説明する。又、「漢蔡琰」の「悲憤詩之一」の「彼蒼者何辜、乃遭此厄禍」の句を載せる。「菅家文章」342三月三日、同賦花時天似醉、應製」に「三日春酣思曲水、彼蒼温克被花催」の句が見える。

補説

●詩題「自詠」と一句目「離家三四月」の「離家」の表現について

菅野禮行氏は著書『平安初期における日本漢詩の比較文學的研究』の中で、第三節 道眞の文學と白居易の文學・四 道眞における「自詠」の詩の一考察」としてこの詩について注目すべき一文を公にされている。以下菅野氏の論を要約する形で引用してみる。

菅野氏は「476自詠」の詩が後集の開巻冒頭に置かれていること自体、重要な意味を持つ」とされ、それは「道眞は左遷当初における自らの心境を最もよく物語る作品の一つとしてこの「476自詠」の詩を意図的に、後集の巻頭に置いたのでなかろうか。「菅家後集」が不遇の中に悶死した道眞の遺言詩集であるならば、幽囚の身であった作者が、当時、恐らくは明からさまに言えなかったであろうと思われる心情が、この詩の中にも秘められているのではないだろうか。(五〇三頁)(筆者の判で原文の旧字体を新字体に変えて引用した。以下同じ)と論を起こされている。筆者はこの菅野氏の論に同意する。現時点では推測の域を出ないのだが、「菅家後集」の作品の配列には、道眞自身の深い配慮と意図が込められていると考えている。単なる制作順の配列ではなく、「菅家後集」を編集するにあたり、表に出ていない多くの作品の取捨選択を施した後、とりわけ巻頭

の詩「476自詠」と巻末の「514謫居春雪」の配列には道真の万感の念を込めた意図的なそれがなされておられ、「476自詠」を「514謫居春雪」の詩情が見事に呼応するように熟慮された上での漢詩集になっていることを、これから「菅家後集」の全作品の注釈を通して実証してみたいと考えている。こうした筆者の推測にこの菅野氏の論は大きな支柱となる。

更に菅野氏は「自詠」という詩題について『白氏文集』との比較を通して次のように論じられている。「自詠」という同一詩題が『白氏文集』では十二首あることを踏まえて、『自詠』の詩の詩的情趣という点になると道真と白居易との間に大きな相違が見られる「同一題でありながら、むしろ極端に対照的でない」(五〇五頁)と総括され、その具体的説明として「これらの内容はいずれも、白居易が自らの分に応じて、その境遇に甘んじている心境を敍したものである。」「遙かに首都を離れた異地の地での作という点では道真の『476自詠』の詩の作詩的背景と共通する」(それにもかかわらず、道真の『476自詠』の詩に見られる詩的情趣は、白居易のように悠々と自適する趣は片鱗も見られない」(五〇六頁)「題や表現が明らかに白詩に依拠していると思われるのに」(詩的情趣そのものが全く隔絶したものである」(五〇八頁)のは、白居易以外の影響があることを考えるべきではないかと更に論を進められている。

一方で、道真の文学的特質の一つを「際立った感傷性にある」(五二三頁)とされ、しかも、それが、「単なる個人的な自」の

境遇を悲しむところに根ざしているとは、私には思えない。」「中国の詩は、自然を歌うように見えるものでも、人生や社会にかわりを持つ作品が、より多く格調の高いものであるという一般的な伝統がある。」(五二三頁)「道真の詩には、感受性や素材、また表現のしかたなどに、個人や私的な範囲にとどまるよりも広く人間全体や社会的背景の問題にまで立ち入ろうとする傾向があるのも否定できない」(五一四頁)と述べ、道真のこの詩の真情は単なる個人的なレベルに留まるものではなく、もっと高次の社会的なものを含むしていることの実証として一句目「離家三四月」の「離家」という詩語の使い方に視点を移されている。中国の古典詩の用例を多く挙げられながら、この語に「左遷や追放、或は失意や不満の旅立ちといった特殊な事情にまつわる一種の悲哀感を、言外に感得せしむるがごとき用法」(五二三頁)があり、その悲哀感の源流は、**語釈**(○離家の頁)で挙げた「楚辞」九弁の「離家」に至ると考察されている。この「楚辞」と道真の他の詩との比較を通し、「楚辞」からの投影を具体的に実証され次のように結論づけられている。「左遷当初における心境は『476自詠』の詩を中心として考察してきたように、多分に屈原を意識したもののようである。ただ道真は、憂国の真情を屈原のように明からさまに直敍しなかった「楚辞」的な表現を通して、それとなく暗示の中に訴えかける方法を取っている」(道真にとつて可能なことは心ある人にそれとなくわかってもらうことであつた」(五三三頁)「道真の感傷は単なる

本文

平仄

三

個人的悲哀にとどまるものではなかったのである。それは、個人や私を超えて、より広く社会や国家の現状と将来がこれであるのかという憤激を、底にたたえていたものではなかったろうか。「道真は、配所での悲哀、屈辱、孤独などに対して、自らを暗に屈原に比すること、身の潔白を主張し、また慰めを得ていたのかも知れない」(五三三頁)

つまり菅野氏の一文は「離家」という詩語に『楚辞』の投影があることを見抜かれ、そこから屈原の憂国の情を暗に自分自身にだぶらせる道真の心情に照射させようとされたものであった。筆者はこの菅野氏の論より多大の教示を受けた。一方で白居易との同一詩題の作品の考察で述べられている両者の詩情の差は、私自身はこれは道真の意図したものだと考えている。言葉を換えるならば、白詩に見られる「自詠」の共通する詩情を否定する手法を使いつつ、道真の太宰府時代の真情を一層浮かびあがらせるものとして白詩を効果的に使っているように思える。このことについては後に詳しく論じる機会を持ちたいと考えている。

我爲遷客汝來賓 ●○○●●○○○
 共是蕭蕭旅漂身 ●●○○●●●○
 欹枕思量歸去日 ○●○○○●●●
 我知何歲汝明春 ●○○●●○○○

脚韻は上平声眞韻。韻字は賓・身・春

校異

○旅雁：雁・鴈(内二)(大鳥)(尊四)(松平)(太二)(太二)

刊本 全本

○七言：ナシ(内二)(大鳥)(尊二)(尊四)(松平)(太二)(太二)

刊本 全本

○題下「鎌倉本作聞旅鴈」分注：(大鳥)(太二)(太二)

刊本 全本

○頭注「聞旅鴈類従本同下有七言二字分注」：(大鳥)

訓読

- ・我は遷客為り、汝は來賓
- ・共に是れ蕭々たる旅漂の身
- ・枕に欹りて 歸去する日を思量すれば
- ・我は何れの歳とか知らむ 汝は明春

通釈

・私は西のはてに左遷されて仮りの住まいを余儀なく強いられ

ている身の上、おまえさんは北の空からやって来た訪問者。

・お互い、もの寂しく異郷にさすらう身の上である。

・(夜もろくろく眠ることも出来ず目覚めがちで) 枕に欝わつ

たまま、許され京に帰ることの出来る日をあれこれ思案する。

・おまえさんは、来年の春になれば北の故郷に帰られようが、

私はいったい、いつになったら京に帰ることが出来るという

のだ。

語釈

○遷客：左遷流謫された人。「客」とは「常に住むべき所を離れて仮によそに行っている人」を意味する。「李白・與史郎中欽聽黃鶴樓吹笛詩」に「爲遷客去長沙西望長安不見家」の句が見える。「漢語大詞典」には「指遭貶斥放逐之人」との説明があり「南朝梁江淹・恨賦」の「或有孤臣危涕、孽子墜心、遷客海上、流戍隴陰」の例をひく。「白氏文集」590山鷓鴣に「樓上舟中夜闌入、夢鄉遷客展轉卧」の句が見える他、白詩にはこの語が多く見られる。「菅家後集」500雨夜に「農夫喜有餘、遷客甚煩懣」の句が、「501題竹床子」に「應是商人留別去、自今遷客著相將」の句が、「509燈滅二絶」に「遷客悲愁陰夜倍」の句が見える。

○來賓：お客として来る。又、その人。來客。「禮記」月令・季秋に「鴻雁來賓」とある。「漢語大詞典」では「◎來作賓客」と説明し、「逸周書」時訓の「寒露之日、鴻雁來賓」の

例をひく。ここでは北国から渡って来た雁を擬人化したもの。

【田氏家集】114七言夏夜於鴻臚 饒北客歸鄉一首に「遠來賓

館接歡娛、旬景災心白首俱」の類似した句が見える。「菅家文章」

「144重陽日、侍宴紫宸殿、同賦玉燭歌、應製。六韻已上成」に

「菊知供奉霜籬近、雁守來賓雲路遙」の句が見える。又、「349

重陽後朝、同賦秋雁槽聲來應製并序」の詩序の一文に「重陽之

後、翌日之夕、秋雁者月令之賓也、槽聲者風窓之聽也」の例が見える。

○蕭蕭：ものさびしいさま。「漢語大詞典」に「○蕭条・寂靜」と説明し、「晋陶潜・自祭文」の「嗚呼我行、蕭蕭墓門、奢恥宋臣、儉笑王孫」の例を、又「唐皎然・往丹陽尋陸處士不遇詩」の「寒花寂寂偏花阡、柳色蕭蕭愁暮蟬」の例をひく。「白氏文集」には「2198一葉落」に「蕭蕭秋林下、一葉忽先委」の句が見える他、多くの用例がある。「菅家文章」には「76海上月夜」に「秋風海上宿蘆花、况復蕭蕭客望餘」の句が、又「349重陽後朝、同賦秋雁槽聲來、應製。并序」に「碧紗窓下槽聲幽、聞說蕭々旅雁秋」の句が、又「264謝文進士新及第、拜辭老母、尋訪舊師」に「怪來言笑夢中間、客舍蕭々夜半分」の句が見える。

○敲枕：枕に倚りかかる。枕にもたれる。中国古典籍の用例考察については後の補説で詳述する。「菅家文章」160石泉に「敲枕閑窓臥、微聲石下泉」の句が見える。

○思量：思いはかる。考えめぐらす。種々に考案する。史料。「漢語大詞典」では「考慮・忖度」と説明し「唐杜荀鶴・秋日

寄吟友詩」の「間坐細思量、惟吟不可忘」の句を挙げる。「普家文章」210客舍冬夜」に「思量世事長開眼、不得知吾夢裏逢」の句が、「274冬夜閑思」に「千万思量身上事、窓間報得欲明天」の句が見える。「普家後集」512九月盡」に「思量何事天庭立、黃菊殘花白髮頭」の句が見える。

○歸去：帰り去る。「漢語大詞典」では「回去」と説明し、「陶潜・婦去來兮辭」の「歸去來兮田園將蕪、胡不歸」の例、「杜甫・發劉郎浦詩」の「白頭厭伴漁人宿、黃帽青鞋歸去來」の例を挙げる。「普家文章」には「喜雨詩」に「田翁歸去處、佇立盛時邕」の句が、「188中途送春」に「風光今日東歸去、一雨心情且附陳」の句が見える。

○明春：明年の春。來春。「普家文章」には「186相國東閣餞席」に「欲辭東閣何為恨、不見明春洛下花」の句が、又「291予會經以聞群臣賦花鳥共逢春之詩、寄上前濃州田別駕。別駕今之不遺、遠辱邊答、詩篇之外、別附書問。予先讀消息。詩云書云。不覺流淚。更用園字、重感花鳥」に「努力明春求友到、一枝巢在舊立園」の句が見える。

補説

●詩題「聞旅雁」と一句目「我爲遷客汝來賓」の「汝來賓」の表現について

既に語釈の所で指摘した所だが、一句目の「汝來賓」に

表現は「礼記」月令・季秋」に「季秋之月、鴻鴈來賓」を踏まえたものだがこの一文は「藝文類聚」秋」の項に「禮記曰、(中略)仲秋之月、鴻雁來、玄鳥歸、羣鳥養羞、季秋之月、鴻雁來賓」と引用されている。又同じく「藝文類聚」鳥部・鴈」の項に「周書曰、白露之日、鴻鴈來、寒露之日、又來」といった一文がある。

一方、この詩題の「聞旅雁」の「雁」の語には、「漢の蘇武は匈奴に使節として出かけたが部下が関連した事件に巻き込まれ、捕らわれの身となった。度重なる降伏への誘いにも応じぬ蘇武を匈奴は北海の辺りに移し羊飼いをさせた。辛苦をきわめながらも忍んでいるうちに漢と匈奴が和睦した。漢は蘇武一行の帰還を求めたが、匈奴は蘇武は死んだと偽って応じなかった。のち漢の使者が匈奴を訪れたとき、蘇武の部下であった常恵はひそかに漢の使者と会い、使者が匈奴の王の単于につきぎのようになうようにしむけた。「漢の帝(昭帝)が上林苑で雁を射落としたところ、足に帛に書いた手紙が縛りつけてあり「蘇武たちはある沼沢の中にいる。」と書いてあった」と。(使者はそのとおりに単于に告げ、やがて蘇武たちは漢に帰ることができた。)(三省堂中国故事成語辞典「一四二頁」という「漢書」蘇武伝)の蘇武の故事を響かせながら暗に望京の念を込めていると考えられる。この思いを更に直接に表現したのが「普家後集」の最後に載せる「514 謫居春雪」の三句目「雁足黏將疑繫帛」の句である。

なお、この「漢書」の一文は「藝文類聚」鳥部・雁」の項に「史記曰、蘇武在匈奴中、昭帝遣使通和、武思歸、乃夜見漢使、使謂單于曰、天子射上林中、得鴈、足有係帛書、言武等在其澤中、使者如其言、單于大驚、乃使武還」と載せる。

●二句目「共是蕭々旅漂身」の表現について

『白氏文集』の中に類似詩題として「⁰⁵⁹¹放旅鴈 元和十年冬作」というのがある。その中の九・十句にこの道真の二句目の表現への投影を思わせる次のような表現がある。「我本北人今謹謫、人鳥雖殊同是客」

●三句目「欹枕思量歸去日」の「欹枕」の表現について

この詩語への投影をうかがえるものとして先学の指摘にもあるように『白氏文集』⁰⁹⁷⁸香鑪峯下、新ト山居、草堂初成、偶題東壁五首―三」の「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看」の二句があることはつとに有名だが、この「遺愛寺鐘欹枕聽」の「欹枕」を具体的に考察されたものに松浦友久氏の「『万葉集』という名の双関語―日中詩学ノート―」という著がある。松浦氏はこの著の中で、まず「欹（欹・欹・欹）枕」にはどのような動作を意味するのかと問題提示され、訓みとしては「枕を欹つ」というものに異論はないが、動作の意味するものは①枕に耳を

欹だてる。②枕そのものを欹てる（傾ける）③作者が枕に欹わる。枕に欹るといふ三説を挙げられている。そして松浦氏の結論としては③説が白詩の実態を読みとった解釈とされる。その説の実証として『白氏文集』の「欹枕」の用例を始めとして、他の多くの中国の古典籍の例をひきながら、説得力のある考察をなされている。この一文の最後に次のようなまとめをされている。

①「欹枕」の「欹」が自動詞であること②その主体が「枕」ではなくて「人」であること、また③「欹枕」に「耳をそばだてる」意の無いこと、は多くの用例に即して疑いない。

「遺愛寺鐘欹枕聽」は明らかに「枕に欹りて（欹わりて・欹して）聴く」と訓まれるべきものだった。（前掲書 一二七頁）

傾聴すべき説である。筆者もこの松浦氏の説に拠りこの道真の三句目の口語訳を試みた。

注

（一）今回の拙論執筆上で殊に参考にさせていただいたものは

○『菅家文章』注釈稿（一）

『白百合女子大学研究紀要29』 一九九三・一二

○『菅家文章』注釈稿(一)

(白百合女子大学「国文白百合25」)一九九四・三
である。

(2) 岩波日本古典文学大系『菅家文章 菅家後集』解説六八―七〇頁

この稿を草するにあたり、諸本の閲覧を快く許可していただいた尊経閣文庫・静嘉堂文庫・島原松平文庫・金沢市立玉川図書館大島文庫・金沢市立玉川図書館加越能文庫・内閣文庫・太宰府天満宮の各位に、厚く御礼申し上げます。又、刊本の収集・複写等の労をとっていただいた有明高専昌子図書係長に深謝申し上げます。

平成十二年十月三十一日執筆了

(やきやま・ひろし／大学院第七回修了・有明高専)